

■はじめに

予告版のダウンロードありがとうございます！
今作はTSモノとなります。
予告版では導入～キス・乳首責めまでです。

こんな形態は処女作なもので色々と思惑錯誤しながら作成していくかと思います。

販売版導入予定内容

- ・ 葵のオナニー
- ・ 和解ックス
- ・ ピロートーク

■タイトル

「TSにおいフェチ幼馴染葵ちゃんと友くん」

■登場人物

葵： ヒロインです。

TSします・男の時から謎の色気あり・大学生・地黒・匂いフェチ
TS後はHカップ・身長はTS前後変わらず165cm

友： 竿役です。

男らしくガタイがいい・葵と幼馴染・葵が女だったらと日頃から妄想してたりする
身長は182cm

葵「ん……んんっ……ん……重い……」

心地よい微睡みを感じながら、寝返りをするとなんだか胸の所が重い。

葵「ん～…なんでえ…？ ん……？ んんんっ？」

胸元を触ろうとしてもぷよぷよのものが邪魔をして触れない。
微睡みは段々と消えていき自然と目が開く。

葵「…は…？ パジャマになんかはいつてる？」

もみもみ

やわらかあい。ペットも飼っていないのに、一体何が入ってしまったんだろう。
しかもなぜか自分の胸を触られているような感覚がある。

もみもみもみもみ

葵「……いやいやいや…なんでぼくの胸さわられて……」

頭が段々とパニックになってくる。
自分の手の動きと一緒に胸を触られている感覚があって、
ということはこのやわらかいのは僕の……

もみもみもみもみもっ……

葵「うそでしょっ！？」

思わずパジャマの襟を引っ張り上げる。

葵「な、な、なにこれ！？ ぼくの……おっぱい！？」

驚愕した。 身体が女の子になってる！？

葵「ど、ど、どういうこと……？ なんでなんでなんで！？」

原因は？ そもそも何でそんなことになってるの？
ていうかこんなこと起こるの！？
いくら疑問を頭の中に巡らせても答えはできない。

ベッドからでて色々調べたところわかることは自分の体が男のモノではなく…
おっきな胸、そして小さくもあったはずの男性器がなくなって凹が、女性の、膣があった。

葵「な、なんでだよお……どうしよう……どうしようって思っても…どうにかなるの？」
葵「でも、えっと……とりあえず…講義…こんなんじゃいけない……」
葵「とりあえず休む連絡しないと……」

休む連絡を大学に伝えるが、事務局の方には女の声に関係を聞かれたので
仕方なく彼女という設定で伝えた。

葵「はあ.....どうしよう.....」

葵「というかこんなおっぱい...一夜で...膨らんじゃったの...？」

気が焦ってまじまじと見ていなかったが、変化した自分の体を鏡で眺める。

葵「すっごくエッチな...身体.....だなあ.....」

ふわあ〜.....

ゴクッ...

独り言を言うと下の方から甘ったるいニオイを感じた。

元々ニオイには敏感だったがこの甘ったるさは女子特有のニオイ...

自分自身がそうになっているから近いという事もあるけどここまで濃いのは初めて嗅いだ。

男のぼくでも思わず息を吞んでしまい、性的興味は手を再び胸に伸ばさせていた。

もにゅううっ

葵「う、.....わっ...！」

改めて触ってみるとその触ったことが無い感触。張りや柔らかさ。

男がみんな触りたくなるのが分かった気がする。

葵「すごい、なんだこれ.....柔らかくてあったかい水風船.....」

ぐにっ

葵「ふえ...っ！？」

胸を触っていると、胸の真ん中、少しぷっくりした突起に手の平がすべりこみ刺激してしまった。

葵「何今の感じ.....乳首...？ 女の子って感じるみたいだったけど...なにこの感じ.....こわっ」

葵「.....」

視線が自然と下に移動していく。

葵「やっぱりこっちも気にはなるよね.....なんだか見ちゃいけないものな気がするけど.....」

昨日まで少しはふっくらしていたのに今は後ろがムチっとなってしまったボクサーパンツを下ろす。

葵「.....やっぱなくなってる...よね」

そこには男性機はなく女性器が――

葵「AVでしかちゃんとみたことないけど.....モザイクもないし...」

陰毛は同じぐらい残っているそれを掻き分けて割れ目に手を振れる。

葵「う、わ……なんかへんな気分になってくる……」

初めての女性器、それが他人の物ではなく自分の物で、男じゃないということを一番実感してしまう。

葵「や、やっぱやめとこ…とりあえず病院に行ったら…こんなこと、あるの…？」

ドンドンドン！

葵「！？」

友「葵ー！　おい！　どうした！　なんか体調わりいんだってー？」

葵「友……！？」

友「わざわざおれが二限抜け出してきてやったんだ、開けろってー
見舞いのゼリーかってきてやったんだぞー」

どうしよう…声を出しても友には気づいてもらえないだろうし……

友「お前、オレに連絡しないなんて珍しいからよー　よっぽどなんじゃねーの？」

ガチャ…

友「お？　開いてんじゃん？　入るぞー」

鍵を開けて外に出るのを止めていたのを忘れていたドアを友はいつもの様子で入ってきて…

友「どうしたよ？　………」

友と目が合う。

友「……葵…？」

葵「どうも………」

友「えっと……妹いたっけ？　いやいねーよな……
お互い一人っ子で……え？　彼女？　は？」

葵「あ、その……本人、です……」

友「え？葵なのか……？」

葵「…うん」

友「！？」

友「うそだろ？！　お前女だった！？　え？前銭湯一緒にはいったじゃん！？　そんな時そんな…は?!」

葵「いや、これは、僕もよくわかんなくて…」

友「いや、よく見せろよ！？」

友は少し興奮気味に胸を隠すように組んだ手を振り払わせる。

葵「う...あ...っ！」

友「うわ、でか...！ って、あ...ごめん」

葵「いや、僕もそうおもう.....」

友「驚いてつい.....まじか...これKとかあるんじゃない...？」

もみ

葵「うわっ！なにしてんのっ！？」

友「いや、目の前にこんな見事なおっぱいあったら触らないと悪いと思って...」

友「ってかさ、てかさっ！...その.....下も？」

葵「...うん.....下も.....なくなってる...」

友「！？」

友「たのむっ！ 見せて！！」

葵「ちょ、ちょ、ちょ！？ なに土下座してんの！？」

友「あ、つい、反射的に.....」

友「いや、こんな機会ないだろうし...せっかく葵が女になってるなら今見てみたいじゃんか」

葵「言ってることはわかるけどさ...」

友「今しかないかもしれないんだし、明日には治ってるかもしれねーだろ？ なぁ...」

友が腕を掴んだまま詰め寄ってくる。

友「なぁ、だめか？」

身体が触れてしまいそうなくらい近づいて聞いてくる。

その時にふと鼻をくすぐる力強い匂い。一瞬頭がくらっとした。

葵「う.....わかったから、そんなに近づかないでよ...」

友「まじか！ やった！！」

葵「.....」

友「それじゃ、その、失礼します」

葵「え?! ちょ?!」

友は、笑顔のまま体勢を下ろし、パンツをずらし女性器を覗き込む。

葵「と、友...おま、ちょっと...！」

友「うわ、スジある、すっげ」

友「これ、もう触ったの？」

葵「触ってないよ、なんか気持ち悪かった」

触っていると悪い気がして思わずウソをついてしまった。 でも友はそんな事に気が付く正確じゃない。

友「そうなのか？ それじゃ触っていい？」

葵「いや、だめだよ。見るだけにして」

友「え〜.....せっかくのチャンス.....葵いたのむよお...」

葵「そ、そればかりは...ダメ」

友「じゃ、じゃ、胸は！？ おっぱい！ なぁこっちは触ってもいいだろ？」

友「てかさっき触ったし」

葵「なんでそんなに触りたがるんだよお...こっちは困ってるんだけど...」

友「そりゃお前.....夢にまで見た.....」

そこまで言って友は言い淀んだ。 夢にまで見るってなんのことだろう...

葵「お、女の子の体...？」

友「...そ、そうそう、だから、な？

オレ達彼女いたことねーし、こんなことあるかもわかんねーじゃん？」

お願いのジェスチャーをして片眼でこちらを見てくる友。

僕はいつもこのお願いによわい。

葵「.....わかった、少しだけだよ。 触ったら...病院行くの手伝って.....」

友「よっしゃ！ わかった！！ 絶対手伝うぜ！ それじゃ」

もにゅっ！

葵「う...あ...っ」

自分で触るとは違う、変な感覚があった。

触られる握られるとわかっていてから触られるのと、

予想できない状態で動かされる感覚が、自分が触れた時との違和感を増加させる。

友「やわらかい？ いや、固い訳じゃねーけど...なにこれ張りか？ 揉んだら滑ってく...すげえ...」

もみゅっもみゅっもみゅっもみゅっ

葵「う〜〜〜...い〜〜〜.....」

変な感覚に体がゾワゾワする。 逃げたくても友は全然満足していなさそう。

葵「友お.....もういいよね...？ なんか変な感じ.....」

友「え.....変って...お前.....」

葵「な、なに.....」

友「感じてんの？」

葵「！？」

感じてる、なんて思いもしなかった。

そう言われたことへの驚きとなぜか恥ずかしい気持ちに顔が真っ赤になっていくのが分かる。

葵「そ、そんなんじゃないって...！」

友「へえ.....でもお前.....」

友「乳首、こんなに勃たせてるの気づいてねーんだ」

コリッ

葵「うへえっ?!」

いったい何をされたのか分からなかった。 突然自分の口から変な声が出る。

体が首がのけ反り友を見ていた視線は天井を見ていた。

葵「へ?へ?.....え？」

友「うわぁ、すげえ感じてんじゃんお前.....なにそれ興奮する...」

葵「ちょ、ちょ...友、なにしてんだよ...興奮ってお前.....！」

友「あ、ごめん.....でもちょっと...やめらんねっ...！」

葵「え!? ちょ.....うわっ!?」

ぽふっ！

僕が座っていたベッドにそのまま押し倒されていた。

目の前には、小学校からずっと一緒に育ってきた友.....

自分の体が女性になっているからだろうか、目の前の友の体がとても大きく見えて、恐かった。

しかしその表情とさっき感じた力強いニオイにまた頭の中がぐらつく。

葵「あ...友なんのつもりだよっ！ こ、こんなのまるで.....！」

友「お前が.....お前が女の体になんてなってからだよ.....っ！」

葵「そんなこと言ってもっ...ひゃうっ?!」

ちゅっ、じゅる.....もぎゅっ、ちゅ、じゅるるっ.....

葵「いうっ!? な、なにさわって...えっ、吸って? んんんっ！」

じゅる.....ちゅば、もみもみ...ぎゅっ...れろ.....

頭の中が混乱するなか刺激される友の方に視線を落とす。

友は手で胸全体を抑え込むようにもんでいた。

盛り上がった左胸の頂点を、乳首と友の口かしたがつながっている。

葵「や、やめ.....友...んっ.....こんなの、おかしいって.....！」

友「ちゅばっ.....おかしくないだろっ

こんなおっぱい目の前にあったら男なんてみんなこうするって、じゅるるっ」

葵「いや、僕、男.....っ！」

友「今は.....こんなデカパイさせて...女に、なってるだろ...っ！」

ぐにっ！

葵「んひいっ!?」

両方の胸からすこしの痛みと甘い刺激が頭にあがってくる感覚がした。

葵「んっ! んんっ!? んいっ!?」

それと同時に、上りあがってきた感覚がはじけるような錯覚を覚える。

ぷしゅしゅ...っ！

葵「ひっ?! ううううっ、んっ!!」

友「まじか...いったのか...葵? 乳首しか触ってねえのに.....」

いった? だれ? 葵...僕? 頭が働かない、目の前がチカチカする。

それと同時に股に湿り気を感じる。

葵「はあ.....はあ.....んっ...はあ.....」

友「なんつー顔させてんだよ.....葵.....っ！」

ちゅっ……

葵「…？」

友の顔が近づいたかと思うと唇になにか暖かいものが触れる。

葵「んはっ…」

葵（またこの匂い……）

段々と意識、視界がはっきりしていくほどに目の前に友の顔が……

葵「ん——っ！？」

友「ん、…なんだ、抵抗しなかったからやっとな受け入れてくれたと思ったのに」

葵「受け入れたって、なにっ！？　ってき、き、き……キスしたの?!」

友「ちょっと我慢できなかった…」

友「というかごめん、順番おかしいよな」

葵「は、はぁ…？　なに言ってんの…？　順番って……？」

友「………」

葵「なに？　そんな改まって、反省してくれてるの…？　そ、それなら恥ずかしいし、シャワー浴びて…」

がッ！

葵「うわっ！」

起き上がろうとした肩を再びベッドに押し込まれる。またキスされるのかと思い目を閉じてしまう。

友「目、開けて…」

葵「……へ…？」

友「……好きだ……」

葵「……？」

友「………」

友「…好きなんだ…葵……っ！」

ガバッ！

葵「………」

抱きしめられて、二度告白されて、友が言っている言葉が理解できた。
でもわけがわからなかった。
でも鼻をくすぐる香りに下腹部が重くなるのを感じる。

葵「ふわぁ……って、な、な、何言ってるの…友？　好きって？　え？　僕のこと？」
葵「そんなわけないか…じゃ、じゃあその…今の僕が好みだったわけ…？」

友「……ちがう」

葵「じゃ、じゃあ……その…え？　どういうこと？」

友「……お前の事が……ずっと、中学の頃からずっと好きだったんだよっ！」

葵「へ……？」

訳が分からないところにまた混乱をする言葉が重ねられる。

友「突然こんなこと言って……すまん」
友「でも……お前が女になってるとか……こんなうれしいことなくて…」
友「めちゃくちゃ触らせてくれるし…」

葵（それは勝手に友が触ってたんじゃない…）

友「それで……それで……すまんっ！」

ちゅ、ちゅぱっ、ちゅ……

葵「んむっ！？　ん、んんっんっ?!」

唇と唇が重なると同時に鼻の奥をくすぐる香りと唇から走る電流に身体がのけ反る。

葵「ンン……んっ……んむっ…」

友「ん、むぁ……なに？　もしかしてキスで感じてんの？」

葵「…はっ…はぁ…？　そんなわけ……んむっ」

ちゅ、れろれろ…ちゅっ……

友の唇が触れる度、友の口から伸びた舌が触れる度、首が勝手に上を向いてしまう。
唇をを逃がしてくれない友が近づくたびに薫る匂いにそれが友から発せられていることに気が付いた。
ほんの少し残った思考でそんなことを考えていた。

葵「はっ…んむっ…んっ！　ン……っ！　んぁ…！　あっ……」

友「口、ふやけてんぞ……　やっぱ感じてんだな…　もっと感じてくれ……」

もにゅ

葵「んゝっ?!　んんっ！」

胸に感じる大きな手の輪郭、でもそれはすぐに離れて—

もにゅ……もにゅ……もにゅ……

葵「あっ！ アあっ！？ な、なにこれ……んっ！！」

今朝できたばかりの僕の胸…おっぱいを優しく持ち上げるように揉んでいる。

葵「あ、ああ……っ！ アあっ！」

リズムカルにあげられるほどにおっぱいが切なくなってくる。

友「葵…めちゃくちゃ柔らかくて気持ちいいよ、お前のおっぱい……ずっと触ってたい」

耳元で囁かれ、身体が反ると友は状態を起こす。

僕の思考を眩ませる匂いが薄くなる。 なぜか頭の中に名残惜しい感覚があった気がした。

友「なんだよその表情（かお）…ああ…っ！ 止められなくなっちゃう…！」

友「こっちも……っ！」

もにゅ……もにゅ……もにゅ……

葵「ああっ！ あっ！ んんっっ！ だ、だめ…だって…！」

二つのおっぱいを同時に揉みあげられるたびに今度はおなかに勝手に力が入る。

それと同時に股の、もともとペニスがかったところにも力が入る。

友「あ………そりゃこんな反応してたら感じてんだらうけど…」

友「葵…気づいてる？」

葵「な、なんのっ…こと？ んっ！ ちょっと止めてよ…それされてたら…あっ！」

友が何を言っているか分からない。 ただおっぱいの真ん中を執拗に触ってきてる。その度に切ない気持ちが喉奥から可愛い声になって出ていった。

友「分かってねえんだな……でもそんな葵もかわいい…」

葵「は、はぁ？ あっ！！ なにって……っ！ あんっ…！」

友「あんって…エロい声だしてんじゃん…ここ…だよ…」

コリッ

葵「ンゝっ！？」

友「気がついてなかったんだな…めちゃくちゃ勃（た）ってたぞ…」

友「はぁっ……やば……」

もにゅ……………

おっぱいへの感触がなくなる。

身体が震えてしっかりとしない目線から友が消えたかと思うと両手首をつかまれていた。

友「んっ……」

ちゅば、れろっ……

葵「んひいっつう?!」

今度はおっぱいの頂点、乳首があるところに暖かく、柔らかく、ねっとりとした感触が現れる。

葵「んっ!? んんっ!! ンッ! んんんんっ! そこ、ダメえええ……!」

突然の甘い衝撃に腕で感触を振り払おうとしても、腕は固定されあげられない。
それ以上にベッドに深く沈み込まれる。

友「れろ……ちゅっ……こんなに固くさせてさ……感じてんだろ?」

友「感じてないとか言っても信じねーけど…ちゅ、ちゅ……なあ どうなんだよ…?」

葵「そん、な…こと、聞かれても……っ! ん!! んはあ、あっ?!」

友「なあ……このまま…いいだろ……?」

友「…いやって言われてもやっちゃうけどさ……」

ヤル? え? 何ってるの?

やる、ヤル? 犯る…?! それって…!!

葵「……だ、ダメッ!!!」

ドンッ——

思わず今できる全力の力で友の体を押しとばした。

つもりだったが、自分の腕の長さ分だけ離れただけだった。

友「え……?」

友「……ダメ…か……そっか……」

友「…すまん……」

そう言うと、友はさっきまでの勢いなく服を正して僕の部屋から出ていった…。

その後ろ姿を見ていると、さきほどまでの苦しさとは違う苦しさが僕の心を締め付けた——。